

# 西ノ辻遺跡第21次発掘調査報告

1990.

財團法人 東大阪市文化財協会

# 西ノ辻遺跡第21次発掘調査報告

1990

財団法人 東大阪市文化財協会

## はしがき

東大阪市には130か所余りの埋蔵文化財包蔵地が知られており、從来よりこれらの保護、調査に努めてまいりました。このたびの国道308号線における新鉄道建設や、道路拡幅・延伸に伴う一連の発掘調査は、東大阪市のほぼ中央を東西に横切るかたちで実施され、これまでにない大規模なものとなりました。

弥生時代の遺跡としてかねてより著名でありました西ノ辻遺跡もこうした調査の結果、縄文時代から室町時代までの埋蔵文化財が確認され、重要な考古遺物も多数出土しました。このたびの西ノ辻第21次発掘調査は他の308号線関係の調査にくらべ小規模ではありましたが、当遺跡の年代を知るうえで重要な縄文時代後期の土器や、めずらしい近世の土取り穴などの考古資料が検出されました。それらを通じて、より一層文化財保護に御理解いただけることを願ってやみません。

なお、発掘調査および整理作業に御理解いただいた東大阪生駒電鉄株式会社（現在 近畿日本鉄道株式会社）、大阪府八尾土木事務所、大阪府教育委員会、大成建設株式会社、およびその他の関係各位に感謝いたします。

平成2年3月31日

財団法人東大阪市文化財協会

常務理事 塚田 氏秀

## 例　　言

1. 本書は東大阪生駒電鉄株式会社が実施した東大阪都市高速鉄道東大阪線建設事業ならびに、大阪府八尾土木事務所が計画した国道308号線および都市計画道路兼港枚岡線建設計画事業に伴う西ノ辻遺跡第21次発掘調査の概要報告である。
2. 本調査は財団法人東大阪市文化財協会が、東大阪生駒電鉄ならびに大阪府八尾土木事務所の委託を受けて実施した。現地調査の期間は昭和60年12月2日より昭和61年2月12日で、松田順一郎が担当した。
3. 本書の執筆は調査担当者による。調査補助および整理作業には次の方々の協力をえた。  
小林辰生、園田義明、多田芳美、中道真司、福田英輝、石割珠貴、奥田美香、  
高知久美子、高野由美子、夏原宣左子、樋口照子、川村美保、西村慶子
4. 遺物写真的撮影はスタジオG F プロに委託した。
5. 検出遺構のうち近世の土取り穴に関しては京都大学構内遺跡調査会ならびに京都大学埋蔵文化財研究センターの五十川伸夫氏、難波洋三氏、浜崎一志氏から御教示を得た。感謝いたします。

## 目 次

序	i
例言	ii
I はじめに	1
II 調査に至る経過	1
III 西ノ辻遺跡の位置と環境	3
IV 調査概要	6
1. 層序	7
2. 遺構、その他	7
近世から近代の耕作面	7
近世の土取り穴	9
中世井戸・ピット	9
弥生時代の溝・ピット	11
縄文時代ガリー	11
3. 出土遺物	12
中世の遺物	12
弥生土器	12
縄文土器	13
V まとめ	14

## 挿 図 目 次

図 1 西ノ辻遺跡21次発掘調査地点と周辺の遺跡	4
図 2 調査地地区割図	6
図 3 f ライン土層断面図	7
図 4 近代耕作面と石垣部分の土層断面	8
図 5 近世跡実測図	9
図 6 中世井戸実測図	9
図 7 近世土取り穴・弥生時代溝・縄文時代ガリー実測図	10
図 8 縄文時代ガリー土層断面図	11
図 9 縄文土器実測図	12

## 図版目次

- 図版一、1. 調査地全景、2. 近代耕作面の溝
- 図版二、1. 近代の耕作面（溝と石垣）、2. 石垣近景
- 図版三、1. 石垣近景、2. 近代・近世溝土層断面
- 図版四、1. 動跡と土取り穴、2. 土取り穴
- 図版五、1. 土取り穴、2. 土取り穴
- 図版六、1. 中世井戸、2. 井戸土層断面
- 図版七、1. 中世ピット群、2. 弥生土器出土状況
- 図版八、1. 縄文時代ガリー検出状況、2. 縄文土器出土状況
- 図版九、1. 縄文時代ガリー土層断面（東断面）、2. 同（中央断面）
- 図版十、中世土器・弥生時代土器実測図
- 図版十一、縄文土器実測図
- 図版十二、中世土器・弥生土器
- 図版十三、弥生土器・縄文土器
- 図版十四、縄文土器

## I はじめに

西ノ辻遺跡は、河内平野の東端、生駒山の麓にある縄文時代から室町時代に至る複合集落遺跡で、東大阪市弥生町、東山町、西石切町1丁目、3丁目に分布する。この範囲の東西は、旧東高野街道から西石切町3丁目の西端までの約400m、南北は、近鉄東大阪線新石切駅付近から東山町、弥生町の南端までの約450mである。標高約6~20m。

昭和16年に、現在の近鉄バス枚岡営業所の地点で土器の散布が発見され、同年に山本博氏、同年と翌年に小林行雄氏らが調査を行った。その際の発掘資料は出土地点名を冠して編年が組まれた。中でも、畿内第IV様式のN地点式、畿内第V様式のI、E(D)地点式は現在に至るまで弥生土器型式編年の標準的な資料として学史的に著名である。

昭和16年、17年の調査以来、発掘調査はながらとだえており、近年までにかつて田畠であった場所も宅地化が進んできた。昭和40年代からは当市の発掘調査体制が徐々に整い、西ノ辻遺跡もしばしば調査対象となってきた。昭和48年には東大阪市遺跡保護調査会が下水管渠工事に伴い調査を実施しているが、本格的な調査としては、同調査会が昭和51年に下水管埋設工事に伴って実施したもので、これを現在第1次調査と呼んでいる。この結果室町時代後半の溝状遺構と土器、瓦、漆器碗などが出土した。その後、昭和52年中には第2次から3次調査で中近世の遺構・遺物が検出されたほか、枚岡営業所の南の隣接地で東大阪市教育委員会によって行われた第4次調査では弥生時代中期の柱穴、土括や土器類、古墳時代の土器が出土した。とくに弥生土器には西ノ辻I式土器の実態を考えるうえで貴重な資料が含まれている。第5次調査は、昭和56年に東大阪市遺跡保護調査会によって枚岡営業所北西隣で行われ、弥生時代中期~後期の旧河道と室町時代の土括、ピットなどとともに同時代の土器類が多量に出土した。その後、昭和57年には今回の調査地の東隣で東大阪市文化財協会が病院建設に伴う調査を実施し、中世の柱穴、井戸、土括を検出した。308号線関係の一連の調査がこの後に続くことになる。

以上の調査の結果から、西ノ辻遺跡には、断続的ながらも長期間にわたって人が居住し、各時代に比較的大きな集落が営まれていたと推測される。現在遺跡の一画には、顕彰碑「枚岡市額田町石器時代遺跡」が立っている。

## II 調査に至る経過

大阪府・奈良県間の輸送能力を高めるため大阪市地下鉄中央線を延長し、奈良県生駒市と結ぶ新鉄道建設が計画された。同時に国道308号線の整備とこれに平行する阪神高速道路の延長もあわせて計画された。しかし、これらの開発予定地内では、すでに鬼虎川遺跡、西ノ辻遺跡などが周知されており、これら以外の箇所でも未知の遺跡の有無を確認する必要が生じた。

このため、東大阪生駒電鉄株式会社は、昭和54年、すでに用地確保のすんだ国道308号線中央分離帯内で、恩智川以西の試掘調査を東大阪市教育委員会に依頼。同教育委員会は東大阪市遺跡保護調査会に調査を依頼して実施した結果、あらたに水走遺跡が発見された。

昭和55年には鬼虎川遺跡内において、鉄道橋脚工事に先立つ発掘調査が実施された。その後、東大阪市教育委員会と大阪府教育委員会の合同で、同年、国道308号線関係遺跡調査会が組織され、調査体制の強化が図られた。同調査会による2回の鬼虎川遺跡の調査とともに、国道308号線以東、鉄道トンネル口付近までの試掘調査が行われ、神並遺跡、植附遺跡が発見された。

308号線関係の西ノ辻遺跡の調査は、昭和57年11月の第7次調査に始まる。この調査では、弥生時代中期の方形周溝墓、壺棺が検出された。この後、現在の新石切駅周辺で引き続き2つの調査が実施されている。昭和58年11月に開始された第8次調査では溝、土塹、井戸、柱穴よりなる室町時代の集落跡が検出された。さらに、同年12月に開始された第9次調査は、第8次調査の隣接地で、鎌倉～室町時代の木棺墓、井戸、溝、土塹墓、柱穴を検出した。

なお、国道308号線関係遺跡調査会は昭和57年3月をもって解散し、その後、あらたに組織された財団法人東大阪市文化財協会と大阪府教育委員会が分担して調査を実施した。

その後石切神社参道以東で行われた試掘調査では、おもに縄文時代、奈良時代、中世の遺構、遺物が検出されていた。いっぽう、西石切町地区の各試掘トレチでも遺構、遺物が認められ、旧国道170号線付近の西ノ辻遺跡に至るまで神並遺跡の範囲が拡大し、それに隣接することが知られた。そこで便宜的に旧国道170号線の東を並行して走る東高野街道をその境界にし、これより東を神並遺跡、西を西ノ辻遺跡とした。

西ノ辻第10次調査は西石切地区の鉄道および道路建設予定地内の2030m<sup>2</sup>を対象とし、東高野街道をはさんだ神並遺跡第4次調査区の西隣で、昭和58年12月より開始された。調査の結果、神並遺跡第4次調査区から続く旧河道の下流部分を検出し、多量の遺物とともに、古墳時代の水利遺構を検出した。また、2本の旧河道も新たに検出した。その上を古墳時代以降の堆積層が覆い、これをベースに中世の遺構群が検出された。遺構面の上部は削平を受けているものの、遺構の密度は高く、鎌倉～室町時代の井戸、溝、土塹、柱穴、土塹墓などがみとめられた。また、遺構からは多数の遺物が出土した。

その後、西ノ辻遺跡第10次調査期間の後半は、その西隣、旧国道170号線までの区間で西ノ辻遺跡第16次調査では、10次調査に引き続き縄文時代晚期から奈良平安時代までの旧河道の堆積層より多量に各時代の遺物が出土したほか、古墳時代の水利遺構が検出されている。また、中世の遺構群も同様に検出された。

これらの調査によって縄文時代から室町時代にいたる複合遺跡の性格がしだいに明かになってきた。西ノ辻第21次発掘調査は昭和60年12月より開始し、昭和61年2月までの期間実施された。この調査は10次調査地区の南西部から16次調査の南辺に隣接しており、これらの調査と同様の遺構遺物が存在するものと考えられた。

### III 西ノ辻遺跡の位置と環境

西ノ辻遺跡は、河内平野の東辺を限る生駒山地の西麓にある。現在の町名では東大阪市西石切1丁目・3丁目、東山町、弥生町にあたる。国道308号線と旧国道170号線の交差点周辺から南北約450m、東西約400mの範囲で同遺跡の考古資料が検出される。

逆断層作用で隆起した生駒山地の西斜面は急峻で、ここを流下する多くの谷は山地斜面を開析し、標高120m付近の谷口から下方に沖積扇状地を形成している。また山地斜面直下には崖錐状の堆積地形がみられる。このような地形からなる山麓の斜面は西に向かって標高を下げるとともに勾配を弱め、やがて河内平野の沖積低地に移行する。西ノ辻遺跡はこのような山麓の緩斜面上、標高約10~20mにある。

扇状地について空中写真や大縮尺の地形図、あるいは現地の観察によってやや詳細にみると谷口直下に形成された土石流堆がさらにその後の水流によって下刻され、その前面に新たな舌状の土石流堆を形成するかたちで発達した合成扇状地であることがわかる。西ノ辻遺跡の北に隣接する辻子谷の扇状地状の地形は、生駒山山麓ではもっとも大きなものである。しかし、土石流堆の分布は予想外に狭く、辻子谷に関していえば、現在の河道が固定された辻子谷から芝集落にかけて発達したものと石切神社参道商店街付近から植附集落にかけて発達したものがあり、扇頂付近ではこれらの間に幾つもの土石流堆が錯綜している。

いっぽう、この東西方向に発達した扇状地状の地形に覆われて断続的にしかみとめられないが、ほぼ等高線に沿って、西ノ辻遺跡より山側標高約100m付近までの間で、数段の段丘面が観察される。これらについてはすでに那須孝悌・樽野博幸両氏が、近鉄東大阪線のトンネルロ付近から308号線に沿って水走に至る地質を論じるなかで、中位段丘、高位段丘に相当すると推測されている。<sup>(1)</sup> トンネルロの地下で標高23m以深に表面が著しく赤色化したシルト質細粒砂層があり、その上位に層厚約7mで礫層をレンズ状に挟むシルト質細粒砂、さらにその上位にシルト層や砂層を挟む未風化の疊層がみとめられ、花粉化石群集の分析によって下層から順に大阪層群上部層、上町層相当層、沖積層下部層と推定されている。また沖積層下部層は現在の河床礫によって下刻されているといわれる。

段丘地形の形成について明確になっているのは、西ノ辻遺跡の西に隣接する鬼虎川遺跡で発掘された繩文海進時に形成された海食崖で、外環状線の東約200mの標高約6mを南北に延びる。海食崖を段丘崖とする底位段丘の表層の構成層は先の沖積層下部層にあたり、同層は後水期、完新世初頭の低海水準期の山麓斜面の堆積物と考えられる。さらに上位の段丘地形については未だ明確ではない。大阪湾沿岸の代表的な段丘構成層である大阪層群らしき堆積物が西ノ辻遺跡の東方約400mのケルンバット状の地形を呈する正興寺山のみならず、生駒山西麓の標

註) 那須孝悌・樽野博幸(1987)：東大阪市神並遺跡周辺の地層、「神並遺跡II」、東大阪市教育委員会・

財団法人東大阪市文化財協会、P102~103。

高50mから100mにかけて点在することが知られている程度である。

ところで、先に述べた沖積下部層を下刻している「現代の河床礫層」は、扇状地状地形の形成とともに生じた山地斜面を流下する網状河川の堆積物の一部であると考えられる。このような河道は308号線関係の発掘調査においてしばしば検出された旧河道とともに一つの流系をかたちづくるものであり、空中写真的判読では山麓斜面のいたるところに溝状の凹地としてその痕跡がみとめられる。降雨の変動、流域の植生の自然的、人为的遷移、侵食基準面である海水準の変動、崖沿いの地盤運動など様々な要因が土砂流出や水流による侵食に変化を与え流路の

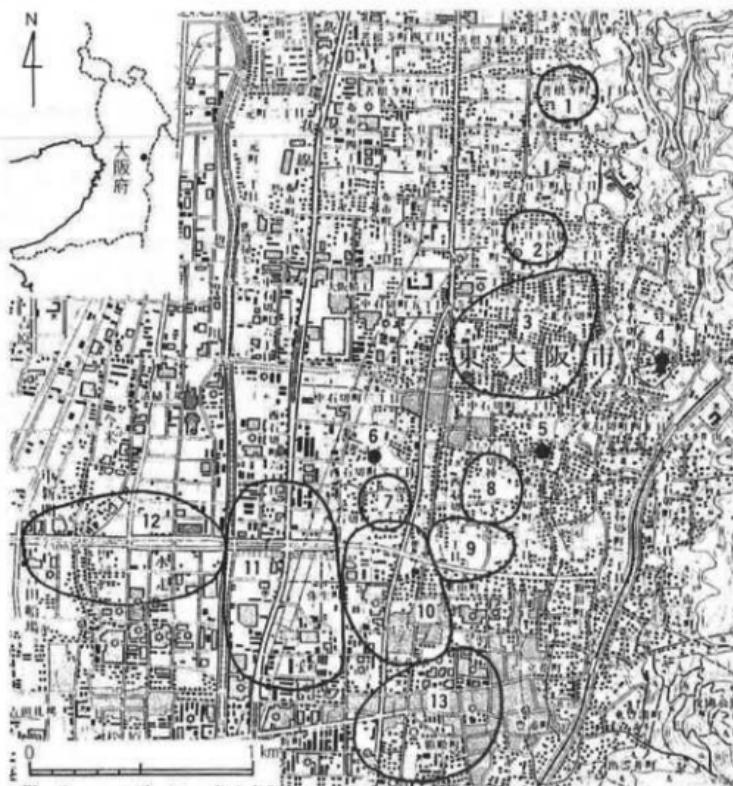


図1 西ノ辻遺跡21次発掘調査地点と周辺の遺跡

- |          |           |           |          |
|----------|-----------|-----------|----------|
| 1. 善根寺遺跡 | 2. 日下遺跡   | 3. 芝ヶ丘遺跡  | 4. 芝山古墳  |
| 5. 大新古墳  | 6. 須山古墳   | 7. 植附遺跡   | 8. 法蓮寺跡  |
| 9. 神並遺跡  | 10. 西ノ辻遺跡 | 11. 鬼虎川遺跡 | 12. 水走遺跡 |
| 13. 鬼塚遺跡 |           |           |          |

位置が変化してきたのである。先の扇状地状の堆積部分は低地に向かって舌状に堆積の場を延長した。そこでは水流と運搬物質はたえず侵食と堆積を繰り返しており、一種の同時侵食構造 (cut and fill structure) を生じているのである。その側方にあってより古い段丘上では、むしろこれを下刻して河道が発達している。このような河川の中でも西ノ辻遺跡の中央を北東から南西に向かって横切る現在の鬼虎川などは辻子谷の扇状地地形とその南の額田谷扇状地地形に挟まれた相対的に低い段丘面を著しく下刻して流下している。これらの河道が下刻され始めた年代は、308号線関係の調査で検出された旧河道内の遺物包含層から推測して、おそらくは縄文海進以降の海水準の低下時期と関連するのである。西ノ辻遺跡の先史時代および歴史時代初頭の集落はこのような河川に臨む低位段丘上に立地していた。

西ノ辻遺跡周辺には縄文時代早期の神並遺跡をはじめ、縄文時代前期の土器が採集された鬼虎川遺跡があり、縄文時代中期以降にも、この山麓部には、日下遺跡（後～晚期）、鬼塚遺跡（中～晚期）、繩手遺跡（中～後期）、馬場川遺跡（晚期）などの遺跡が点在する。

同遺跡周辺の弥生時代の遺跡の立地は地形の条件から、大きく3種に分けられる。まず、先の低位段丘の下端に隣接する沖積平野であり、この時期の鬼虎川遺跡（前～中期）が著名である。次に低位段丘および扇状地地形緩斜面に立地する遺跡で、神並遺跡をはじめ、西ノ辻遺跡、鬼塚遺跡、皿池遺跡など、中期から後期にかけての遺跡が多い。第3には、標高80～100m付近の扇状地地形上半～扇頂部あるいは、土石流堆積段丘や尾根の末端に立地する遺跡がある。これらは、ふつう高地性集落とよばれるが、神並・西ノ辻遺跡周辺には発見されていない。東大阪市内では山畠遺跡や岩滝山遺跡（いずれも中期～後期）がある。

ところで西ノ辻遺跡第21次調査区は、東は神並遺跡と接しており、その西端は弥生時代には西ノ辻遺跡に含まれひとつの集落を形成していたと考えられる。また、両遺跡の北には植附遺跡が隣接しており、中期から後期の土器が出土している。これら鬼虎川遺跡をも含めた一連の集落跡からの発掘成果は、当時の集落空間の配置、集団関係や生業とその歴史的な変遷といった問題を解く手がかりになるであろう。

さて、古墳時代の西ノ辻遺跡周辺では、その東の山麓斜面のより上部には古墳時代後期、6世紀末の神並古墳群があり、5世紀代の塚山古墳が北西約500mにある。集落跡では、北方に芝ヶ丘遺跡、馬場遺跡が、南方には、鬼塚遺跡がある。これまでの神並遺跡の調査でも古墳時代の遺構が検出されており、西ノ辻遺跡では、大規模な水利遺構や堀立柱建物跡などの遺構が検出されている。このようなことから、生駒山西麓では5世紀頃から古墳が各所に築造され、またそれらが、群集墳として山地の尾根や扇状地の上部に変遷していくいっぽう、底平な土地条件においては、より生業と結びついた集落の開発が高い密度で進行したと考えられる。奈良時代以降もその傾向は引き続き、現代までに残された人間活動の痕跡は無数にある。このような経過のなかで、先史時代以来人びとが深く関与してきた自然景観は大きく変貌した。

#### IV 調査の概要

調査区は現在すでに完成した近鉄東大阪線の新石切駅の南東、旧国道170号線の東側に隣接した場所で、鉄道路線と国道308号線にはさまれた細長い領域である。東西約55m、南北10~19mで、調査面積は975m<sup>2</sup>。

同地区は西ノ辻遺跡第10次16次発掘調査と鉄道建設関連工事の進入路として利用されていた場所で、発掘調査直前には盛土で整地されていた。本来は、全体に田畠であったが、その後西半部分は盛土で造成し駐車場、空地になり、東端は外科医院の鉄骨建物であった。

調査はまず、機械掘削で近現代の旧耕土上面まで盛土を除去した。その後、旧耕土層以下を無遺物層と考えられるいわゆる「地山」（沖積下部層に相当する底位段丘構成層）面まで人力掘削で調査した。

調査区全体は、近世から近代に行われた耕地造成のために、それ以前の遺構や堆積層は削平されほとんど失われていたが、西半部分では比較的深い遺構がわずかに残存していた。これらは細緻をまじえる黄褐色の極細粒砂からシルトの地山層を切ったもので、遺物から知れる年代に対応してそれぞれ異なる堆積層を覆土としていた。調査区の東半では地山層が深く削平された上に現代の盛土層がのり、東端部分では建物の基礎などで攪乱されていたため遺構は検出されなかった。



図2 調査地地区割図

## 1. 地区割

地区割は、昭和55年度実施の鬼虎川遺跡調査時に設置した国土座標系をもちいた。東大阪市川中 ( $X=146.3$ ,  $Y=-29.9$ ) を起点とし、X軸を100mごとにローマ数字で、Y軸を100mごとにアルファベット大文字で区画標記し、大地区を設定した。さらに、それぞれの100m方画のX軸、Y軸を5mごとにアラビア数字とアルファベット小文字で区画表記し、小地区を設定した。区画された座標軸の交点の表記をもって、その北西側にできる  $5 \times 5$  m の小地区名とした。本調査区の各地区名称は図に示したとおりである。遺物の出土位置、遺構、堆積層の分布の記述は、おもに上記の小地区を用いた。

## 2. 層序

まず、現地表を形成する盛土下にごく最近までの耕作土が厚さ約10cmで堆積しており、この下に薄い鉄床を挟んで、耕作地造成のための盛土層が認められた。「地山」のブロック土の間に耕土をまじえる。層厚約20~60cm。耕土のみを盛土として挟み込んでいるところもある。同層は調査区西半を西に向かって層厚を増し、旧来の緩い傾斜を埋めるかたちで堆積していた。一部は調査区西辺の石垣の下にもぐりこんで、旧耕土（下）（近世~近代）を覆う。したがって、石垣は近代に積まれたものと判断される。盛土層は調査区西端では、さらに下の近世土取り穴内に堆積した細かい地山のブロック土をまじえる耕土らしき層とこれと同時期と思われる旧耕土を覆っていた。それ以外の場所でも盛土直下に後述する縄文時代から近世までの遺構や凹地の堆積層が地山をベースにして検出された。

## 3. 遺構、その他

### 近世から近代の耕作地（図4、図版二・三・四）

現代の盛土下の旧耕土は近代の盛土をベースにしているが、この盛土層のなかに挟み込まれた耕土は後述する土取り穴内に堆積していた耕土であろう。耕土直下、調査区の南西隅一帯では鉄跡を検出した（図5）。鉄跡はWSW-E NE方向に10条ほどほぼ並行しており、深さ3~10cm、幅20~100cm。その北側にはこの耕土面を切って平行する溝が検出された。

調査区の西辺には南北方向に、西に落する耕作地の段があり、これに沿って積み上げられた石

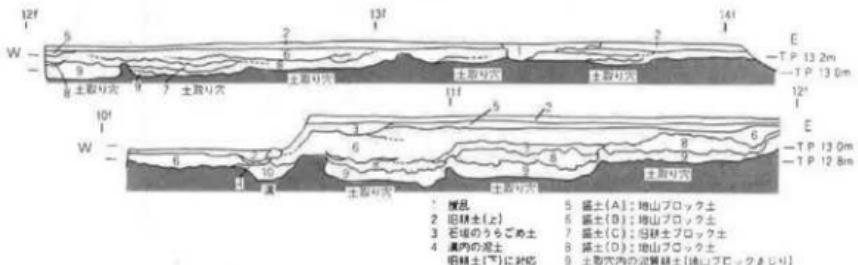


図3 fライン土層断面図

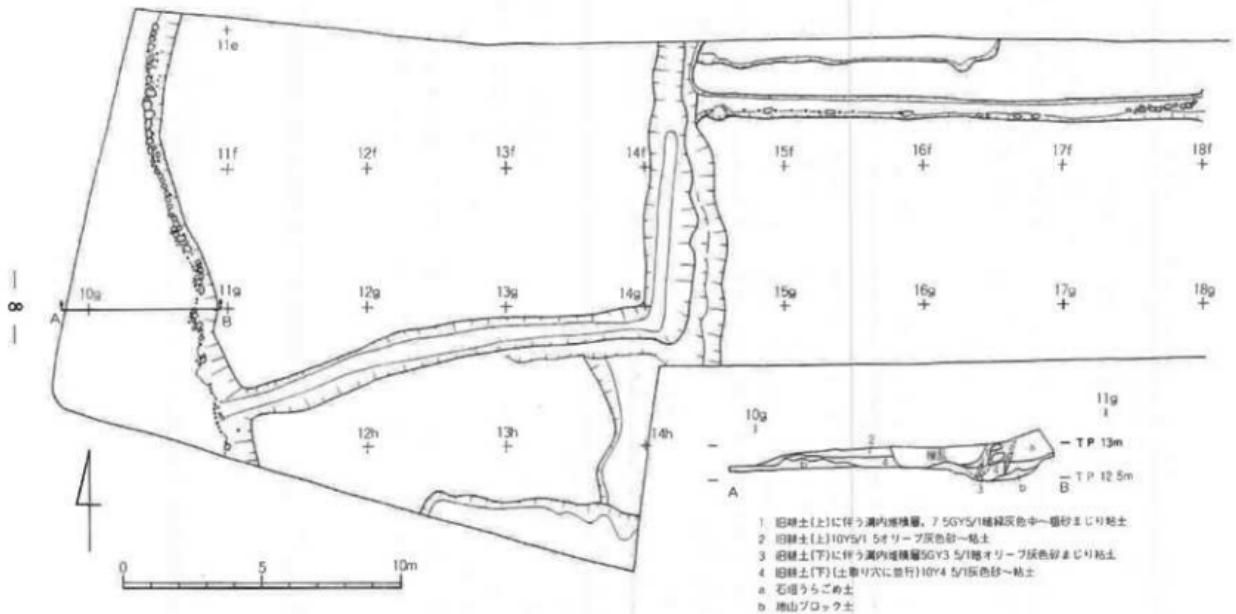


図4 近代耕作面と石垣部分の土層断面

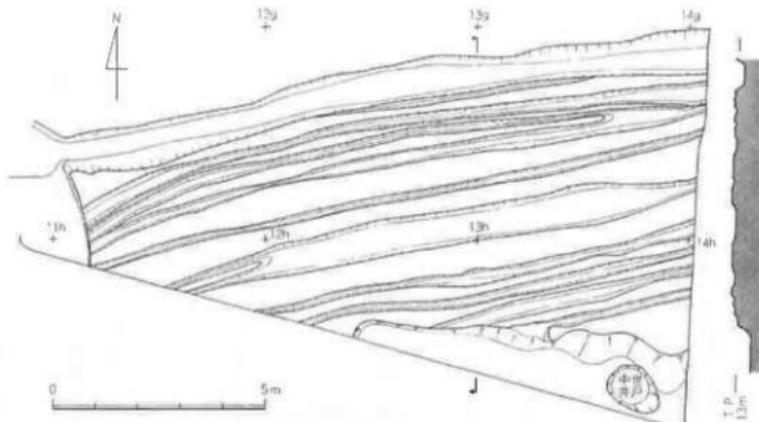


図5 近世鎌跡実測図

垣が検出された。石垣の基部に沿って耕作に伴う溝がみとめられた。溝内堆積層は、2時期に分層でき、より古い層では石垣ではなく、杭列によって土留めを施していたようである。この遺構面上の堆積層からは染付け椀の細片などがわずかに出土した。

調査区の北東部では、盛土層の一時期と並行する耕作面が検出され、これに伴う溝を確認した。近代のものであろう。

#### 近世土取り穴（図6、図版四・五）

調査区南西隅の近世の耕作地面の北側14ライン以西で、同時期の土取り穴を検出した。灰黄色の地山（粘土まじり極細粒砂→シルト）をアゼ状に掘り残したかたちで区画された土塹群である。幅約1～2.5m、深さ約60cm、さまざまな長さをもち、長方形ないしは長椭円を呈する。これらはほぼN NW-S SE方向に長軸を平行させて並ぶ。土取り穴の底面は平坦、側壁は袋状にえぐられておりオーバーハングしている。土取り穴の深さは東ほど浅く輪郭も不明瞭になる。本来、土取り穴は西に低い当地の緩斜面に棚田状に掘られていたらしい。土取り穴の切り合関係をみると、南より北のほうがあとに掘られたような傾向がうかがえる。土取り穴内には泥質の耕土らしき土が堆積しており、これらの穴をあけた後も何らかの耕作が行われていたようである。なお、同様の土取り穴は京都大学構内の発掘調査でも

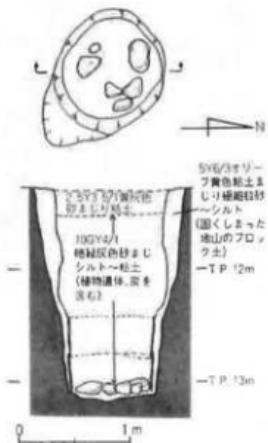


図6 中世井戸実測図

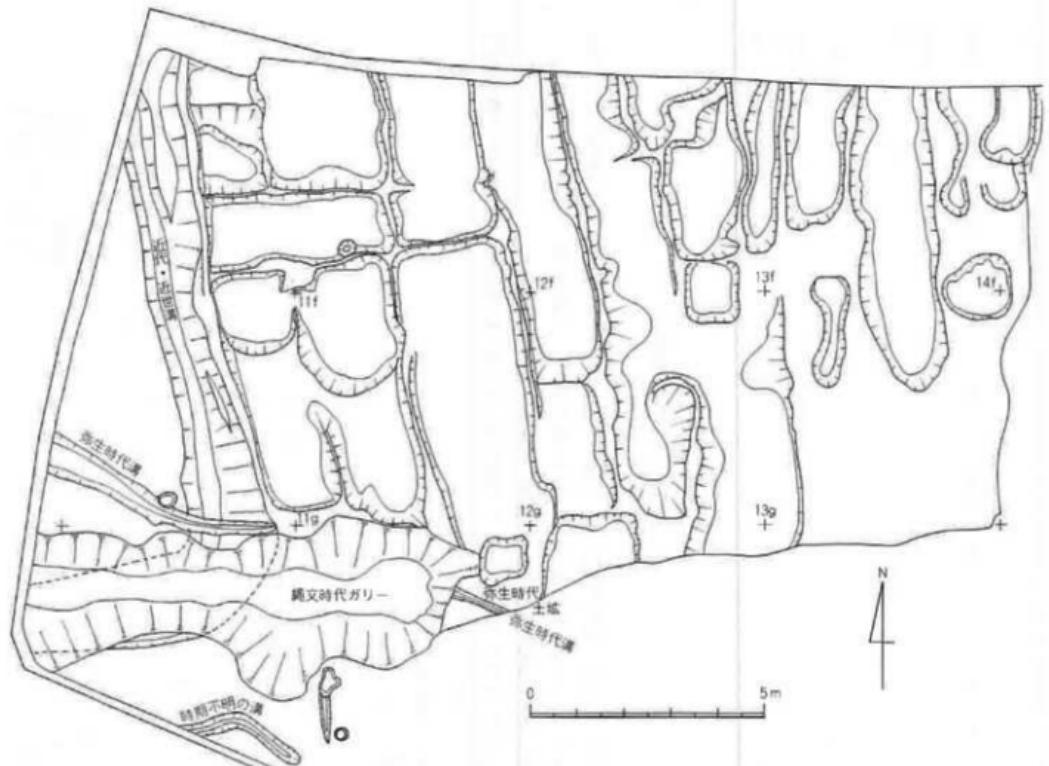


図7 近世土取り穴・弥生時代溝・縄文時代ガリー実測図

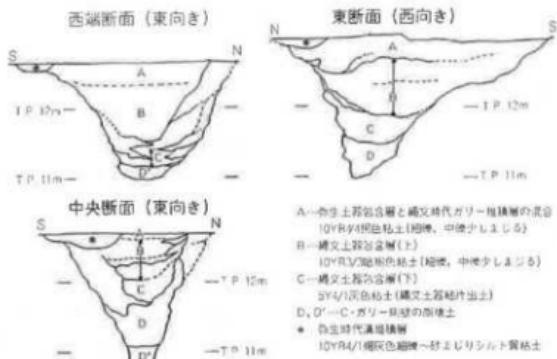


図8 縄文時代ガリー断面図

(注) 検出されている。

#### 中世井戸、ピット(図6・7、図版六)

調査区南西隅で検出された近世の耕作地の南東隅で、中世の井戸を検出した。検出面は搅乱層の下面で、井戸の上部は削平されていた。検出面からの深さは約1.6m、直径約80cmで、掘かたの直径は約1.3mであった。下部には腐朽した曲物の井戸枠が2段分貼り重ね、底には礫が散乱していた。井戸内の堆積層は暗緑灰色を呈する砂まじりのシルト～粘土で、14世紀中頃の瓦器碗、土師器皿、土釜の破片が出土した。ピットは調査区南西隅付近で数個検出された。根石を残すものもあった。覆土からは土師器、瓦器の細片が出土した。

#### 弥生時代溝・ピット(図6、図版八)

調査区の南西隅をWSW-ESE方向にわずかに屈曲して走る弥生時代の溝を検出した。溝は西に向かって傾斜している。幅約20~40cm、深さ約20cm。溝の堀りかたは削平を受けていた。同時期の溝が調査区の南辺でも検出されており、規模もほぼ同じ。溝のほかに、ピット(ないしは土塹)を検出した。1×1m、深さ10cmの隅丸方形を呈する。以上の遺構からは、弥生時代中期(畿内第三様式)の土器が出土した。

#### 縄文時代ガリー(図6、図版八)

上記の弥生時代の溝に隣接して、縄文時代の堆積層を含むガリーが検出された。古代より水田開発などが進んだため、西ノ辻遺跡周辺の地形はかなり平坦化したと考えられる。おそらくは低位段丘面を下刻した河道やその上に堆積した薄い土石流堆積物が今日みられるよりも起伏のある景観を作っていたであろう。これまでの調査によって本調査区にきわめて近接した場所で縄文時代以来の旧河道が2本検出されており、これらの河床を局地的な侵食基準面としたガリーが旧河道の谷壁に形成されていたと考えられる。

本調査区で検出したガリーは幅約2.5m、検出面からの深さ約1.8mで、断面形はV字形を呈

(註) 五十川伸夫・浜先一志・伊東隆夫(1989): 第2章 京都大学病院構内A J 18・A J 19区の発掘調査、「京都大学構内遺跡調査研究年報1986年度」京都大学埋蔵文化財研究センター、P24-25。

する。隣接した旧河道の埋没にともない、基準面が上昇することによって侵食が止まり、土砂が堆積したのである。ガリー内堆積層の断面を図8に示す。この堆積層中からは縄文時代後期の土器片が出土した。

なお、上述の旧河道内の堆積層のほとんどは弥生時代中期から古墳時代の遺物包含層であり、今回のガリー内堆積層とは明瞭なヒアタスがある。このことは河道内の縄文時代後期から晩期の堆積層がその後かなり侵食されたことを示唆する。

### 3. 出土遺物

西ノ辻21次調査区では底位段丘構成層をベースとして、縄文時代から近世までの遺構が検出された。しかし、これらの遺構検出面は近代・現代に削平されているため、調査の対象となるような、調査区全体に広がる遺物包含層は認められなかった。ごく新しい時期の出土遺物を除いてほとんどすべて前述の各遺構より出土した。

#### 中世の遺物（図版九・十二）

調査区南西部の搅乱層の下面で、上部をかなり削平されたかたちで検出された井戸より土師器皿破片、瓦器碗破片、瓦質および土師質の釜破片などが出土した。土師器小皿（1～4）は、直径約8cm、高さ約1.6cm。浅黄橙色～にぶい橙色を呈する。手づくねによる成形の後、口縁部と内面にヨコナデを施し仕上げている。底部から口縁部に丸みをおびてつながり、内窪ぎみに口縁端部を仕上げるもの（3）と、屈曲して直線的に外傾し、やや外反ぎみの口縁端部を仕上げるもの（1、2、4）がある。5は中皿で口径18.5cm、高さ2.4cm。上げ底ぎみの底部から丸みをおびて外傾し、口縁端部に強くヨコナデを施す。にぶい橙色を呈する。小皿、中皿とともに緻密な胎土で雲母の細粒、長石粒とクサリレキが目立つ。瓦器碗（6）は直径10.6cm、高さ約3cm。浅く底部に高台を持たない。内面の暗紋は粗雑で乱れた渦巻である。長石、石英の細粒砂を見かける。釜には瓦質（7）と土師器（8）の資料がある。7は弱く内傾し、平坦な口縁端部で、外面にはヨコナデの段がつく。頸、胴部ともにヨコナデを施す。内面は横方向のハケメ調整。口径約21cmで小型である。灰白色を呈し、長石、石英の粗粒砂を多く含み、わずかにチャート粒をともなう。8は短く外反する口縁端部と下方に少し傾く鉢をもち、内外面ともにナデで仕上げる。口径約22cm。浅黄色を呈し、緻密な胎土で、長石、石英の細粒砂、雲母の極細粒砂をみとめる。瓦器碗の形態的特徴を既存の編年にあてはめると、以上の遺物および井戸の年代は14世紀中頃となろうか。

#### 弥生土器（図版十、十二、十三）

弥生土器は地山上面と縄文時代のガリー上面を横切るかたちで検出された、細い溝内から出土した。壺（9）、鉢（1）、甕胴部下半（11）がある。9は広口壺で、ほぼ完形。直立ぎみに開く頸部に、強く外反する口縁部を持つ。口縁端部は上下に少し拡張して面を作り、簾状文を施す。胴部外面はヘラケズリおよびナデ調整の後、ヘラミガキを施し、最大腹径部に櫛梳波状文、胴部上半部に直線文、胴部上端から頸部および口縁端部は簾状文を施す。胴部内面はハケメ調整、頸部・口縁部内面はなで調整で仕上げる。最大腹径約23cm、口径約16cm、器高28.5cm。

明黄褐色を呈する。10の鉢は内弯ぎみに外傾して立上り、短く外反する口縁部を持つ。口縁端部は面を取る。外面はヘラケズリ、ハケメ調整の後ヘラミガキを施し、内面はハケメ調整の後同様にヘラミガキを施す。口径約29.2cm、器高約22.8cm。黄褐色を呈する。11の甌は底部から胴部下半の破片で、外面にはヘラケズリ痕、内面にハケ原体の圧痕をわずかに残す。底径6.4cm、現存高約14.6cm。にぶい橙色を呈する。上記3点とともに粗粒の角閃石、長石を含み、ハントレイ岩粒もみとめられる。これらは畿内第Ⅲ様式に属し、弥生時代中期の所産である。

#### 縄文土器（図9、図版十一、十三、十四）

縄文時代ガリーの堆積層の上部（断面図A層）から晩期の土器片、中位（B層）からは後期の土器片が少量出土した。後者はほぼ同じレベルに散乱した状態で発見され、後世の擾乱を受けていないものと思われる。（図版八-2）。

図9は頸部下端の刻み目突帯を残す晩期船橋式土器で、胴部外面はケズリ調整。にぶい橙色を呈し、胎土には角閃石、長石の細～極粗粒砂、クサリレキを含む。

縄文時代後期の土器片は、細片を含めて數十点あるが、ここでは紋様や器形をとどめるのみを掲げる。13は、波状口縁の深鉢で、口縁部波頂部に近い部分であろう。口縁部外面が肥厚する。直線的な沈線を4条縱方向に配し、その両側はわずかに肥厚する。いわゆる「縁帶文土器」の一つである。13から16は胴一個体の深鉢破片であろう。13、14は頸～胴部の境。頸部は無文でナデで仕上げ、胴部は貝殻調整の上に6本単位の垂下条線を施す。内面はナデ。褐色ないしはにぶい褐色を呈し、長石の極粗粒砂、雲母の細粒砂が目立ち、石英の極細粒砂を伴う。17～20も同一個体の深鉢破片。ていねいに磨いた器面に櫛状工具で多条沈線の硬直化した渦巻文らしき紋様を描き、ヘラ沈線でその輪郭をなぞっている。内面はナデ調整。注口土器かと思われる。明褐色を呈し、胎土中には角閃石、雲母の中から粗粒砂を含み、クサリレキを伴う。21、22も同一個体の深鉢破片であろう。強く外傾する頸部で口縁端部は無文。頸部外面に二枚貝の調整痕を残す。内面はナデで仕上げる。胴部は縄文地に垂下条線を斜格子状に施す。縄文はL R。にぶい褐色を呈し、角閃石、長石の細～極粗粒砂を多量に含む。粗粒の雲母は比較的目立つが、石英はかなり少ない。23も水平口縁の深鉢で、胴部上半に擦消縄文の三角文とその内側にヘラ描き沈線の同心円文を描く。口縁端部

上面は屈曲して肥厚し、縄文を施す。縄文原体は胴部、口縁部とともにL R。にぶい褐色を呈し、粗～中粒の角閃石、長石を多量に含む。また、中粒の雲母も比較的多く、花コウ岩粒を伴う。24は、浅鉢底部であろう。底面はやや上げ底ぎみである。にぶい橙色を呈し、長石の細～極粗粒砂を多量に含む。中粒の雲母も目立つが、石英や角閃石は微粒でほとんど含まない。以上の縄文時代後期の土器は北白川上層式3期に並行するものと思われる。



図9 縄文土器拓影（原寸）

## V まとめ

今回の調査は、すでに調査された西ノ辻遺跡第10次・16次調査区の隣接地で行われ、当初これららの調査と同様多くの遺構・遺物が検出されると思われた。しかし、古い時代の遺構や遺物包含層の上部は近代の整地によって削平され、調査区の東半ではほとんど調査の対象となるものはみとめられなかった。いっぽう、西半では、近世以前の遺構や遺物包含層がわずかに残存していた。近世の土取り穴、鉛跡、中世の井戸、ピット、弥生時代の溝、ピット、縄文時代のガリーなどである。

土取り穴から採取された土の用途は素焼の陶器や瓦の材料であったと思われるが判然としない。ただ、この土塚群の比較的の整然とした配列をみると、坪あたりいくらかの値段で買い手が土を取りにきたとか、あるいは焼き物の製造工程に合わせた採取単位といったものがあったとか、ある種の計画性を考えることができる。

縄文時代のガリーと呼んだ地形に関しては、西ノ辻遺跡10次調査でも同様のV字形の溝が検出されており、堆積層の時期もほぼ一致している。これらの地形はきわめて微少なものだが、当時の環境変化を考えるうえで重要な手掛りとなるかもしれない。

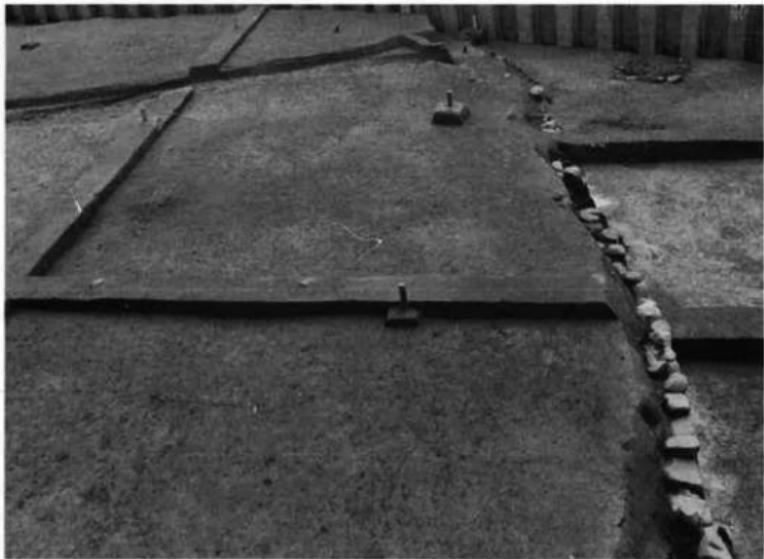
# 図 版



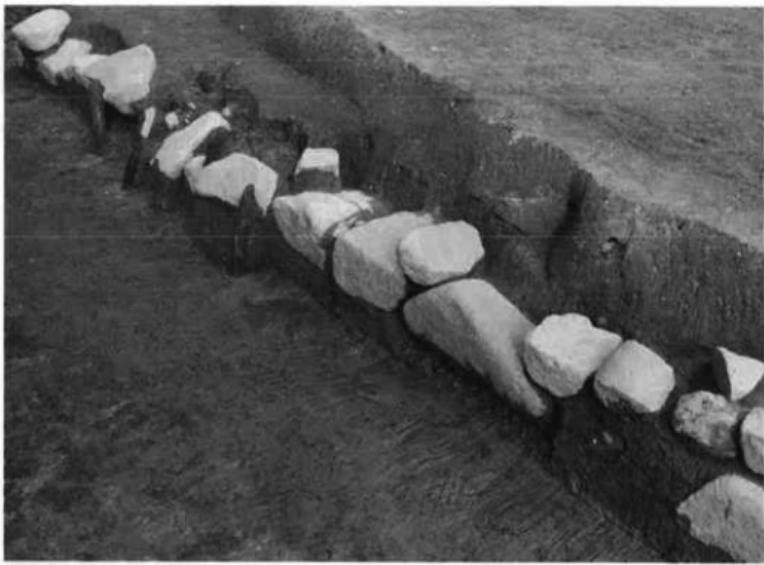
1. 調査地全景



2. 近代耕作面の溝



1. 近代の耕作面（溝と石垣）



2. 石垣近景

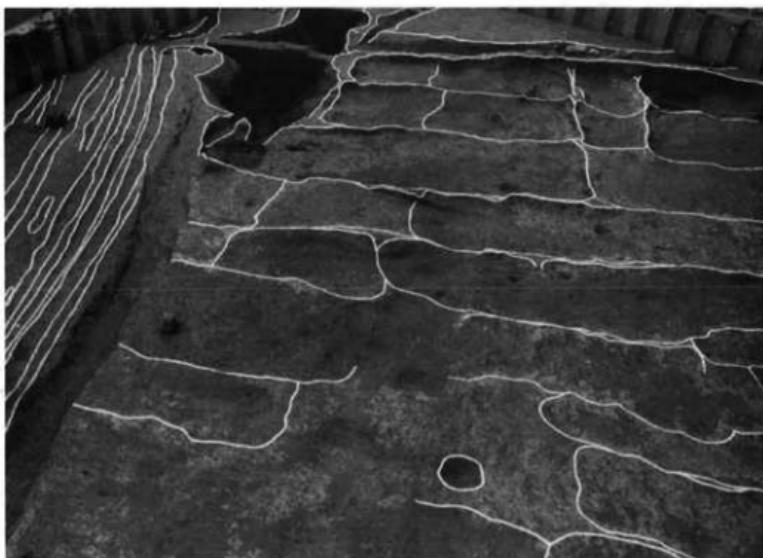


1. 石垣近景



2. 近代・近世溝土層断面

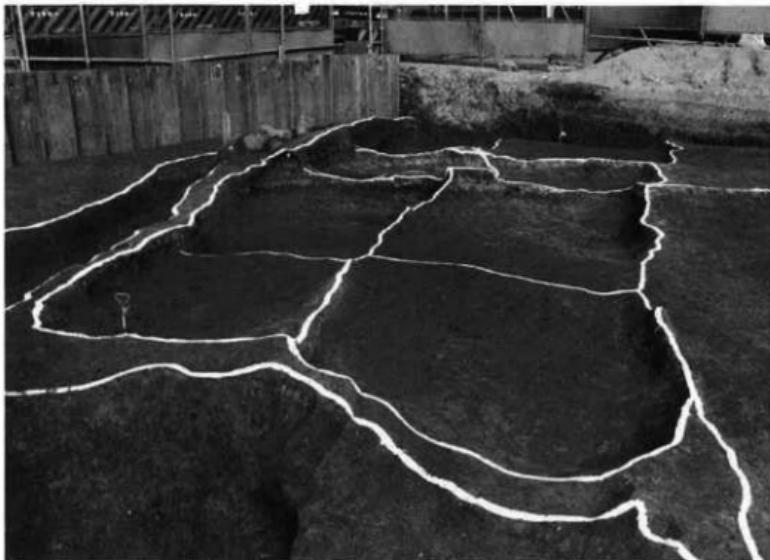
図版四



1. 銅跡と土取り穴



2. 土取り穴



1. 土取り穴



2. 土取り穴

図版六



中世井戸



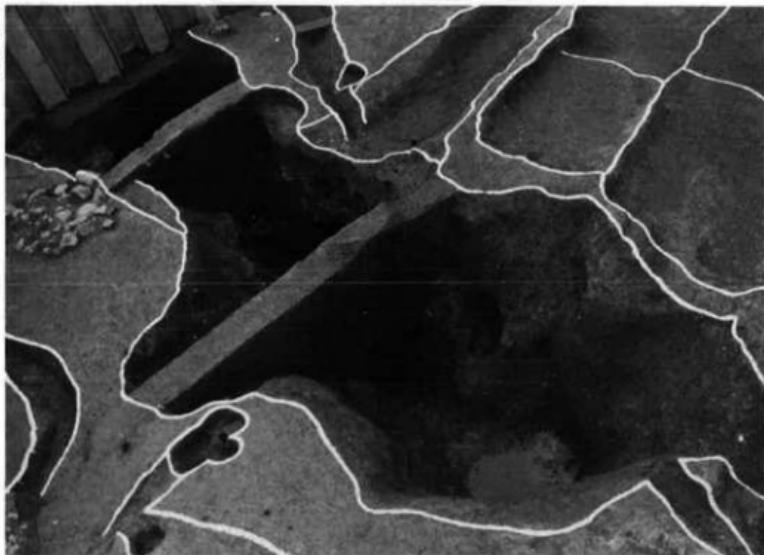
2. 戸井層断面



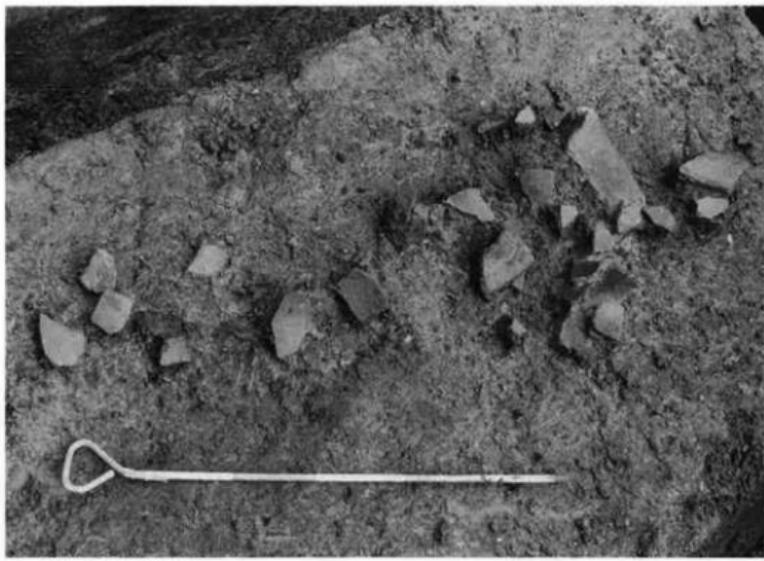
1. 中世ピット群



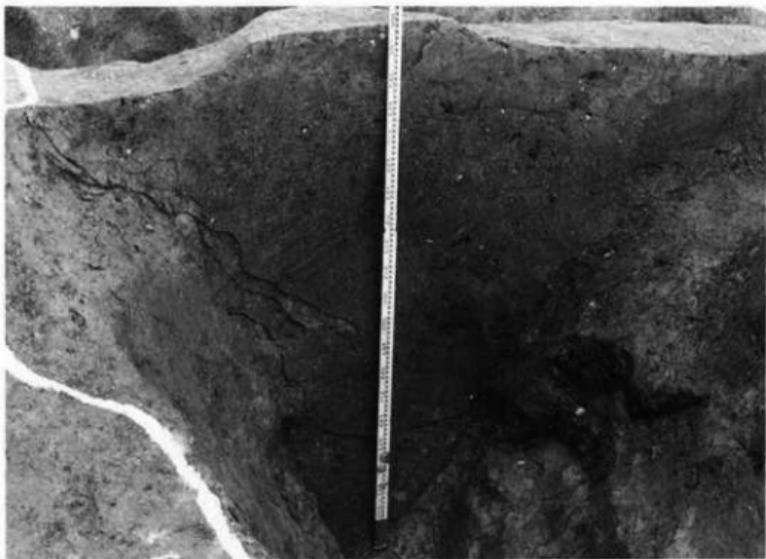
2. 弥生土器出土状況



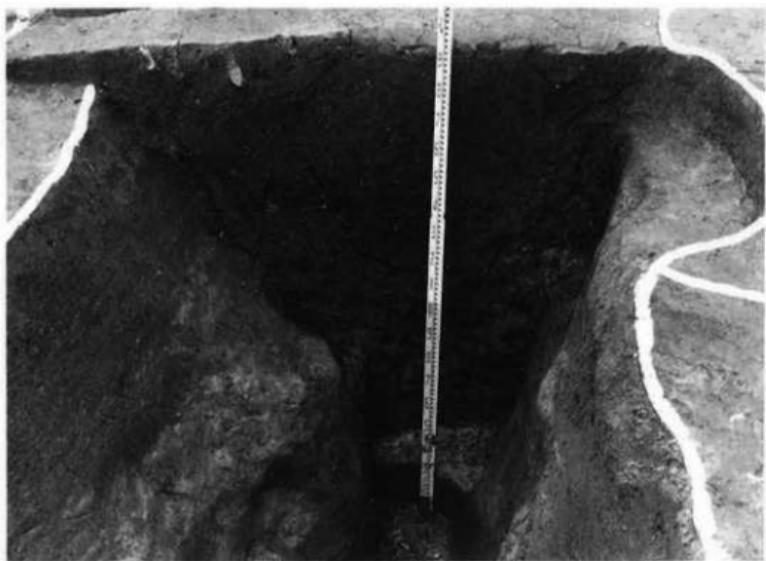
1. 鋼文時代ガリ一検出状況



2. 鋒文土器出土状況

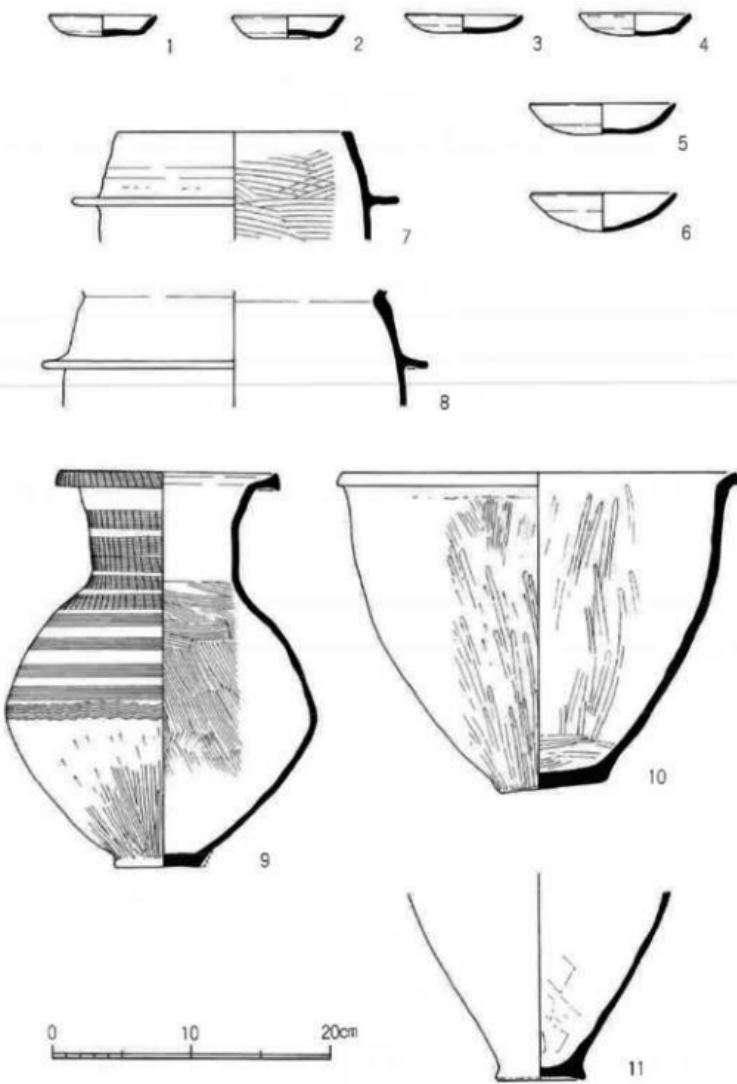


1. 縄文時代ガリー土層断面（東断面）

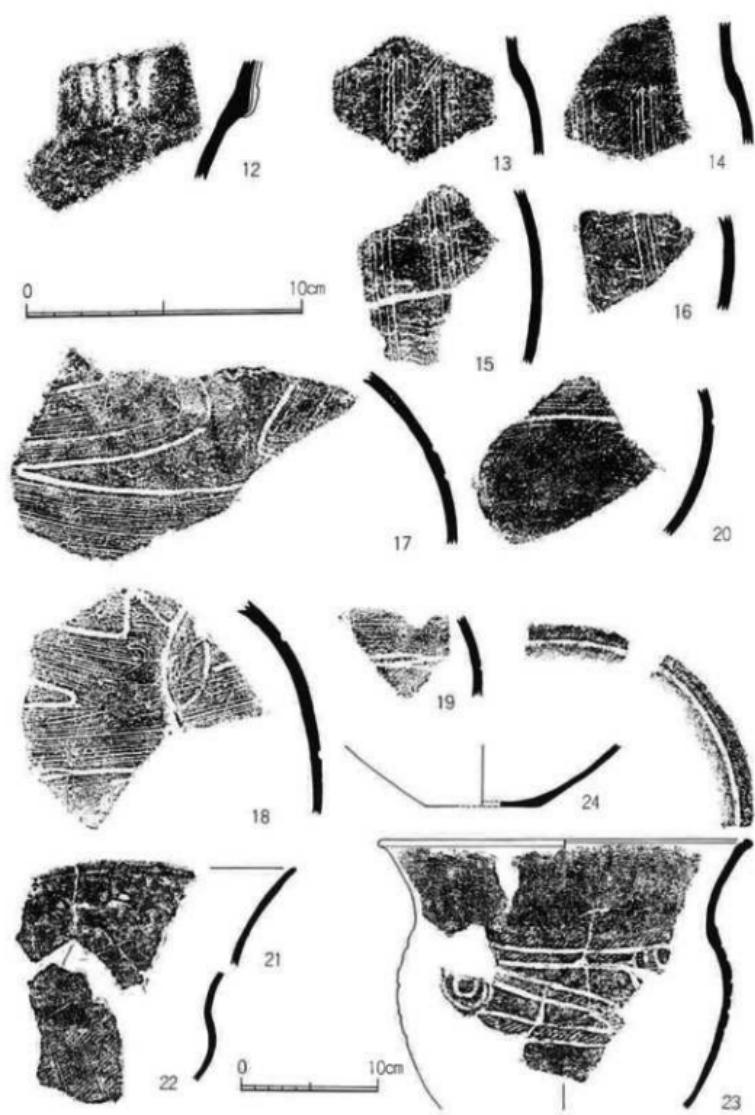


2. 縄文時代ガリー土層断面（中央断面）

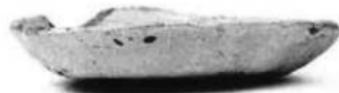
図版十 中世土器・弥生時代土器実測図



図版十一 繩文土器実測図



圖版十二 中世土器・弥生土器



1



2



3



4



5



6



7

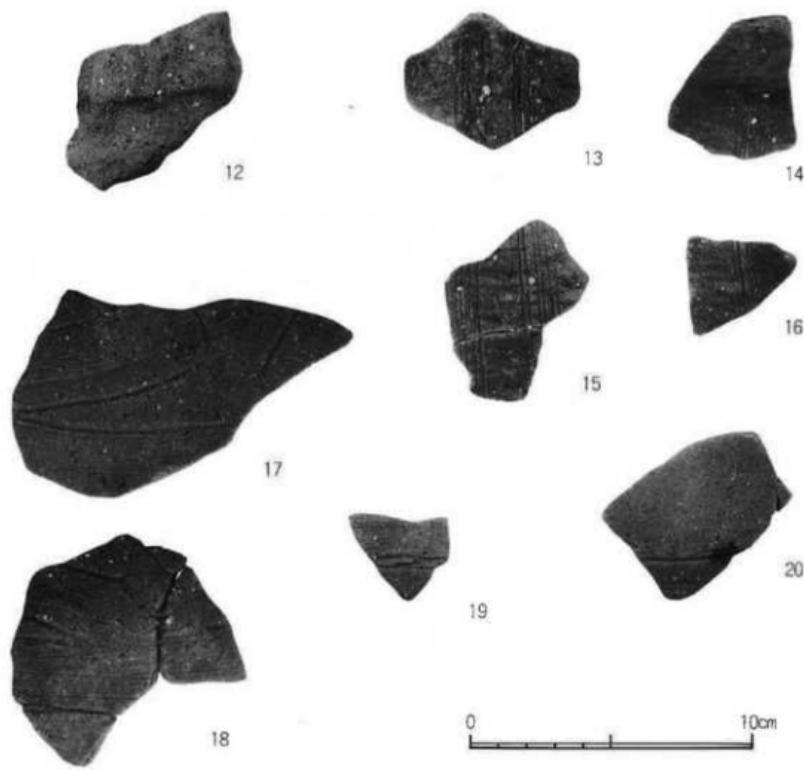
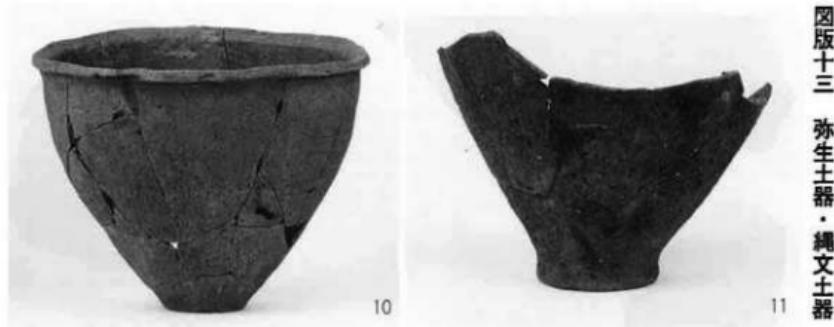


8



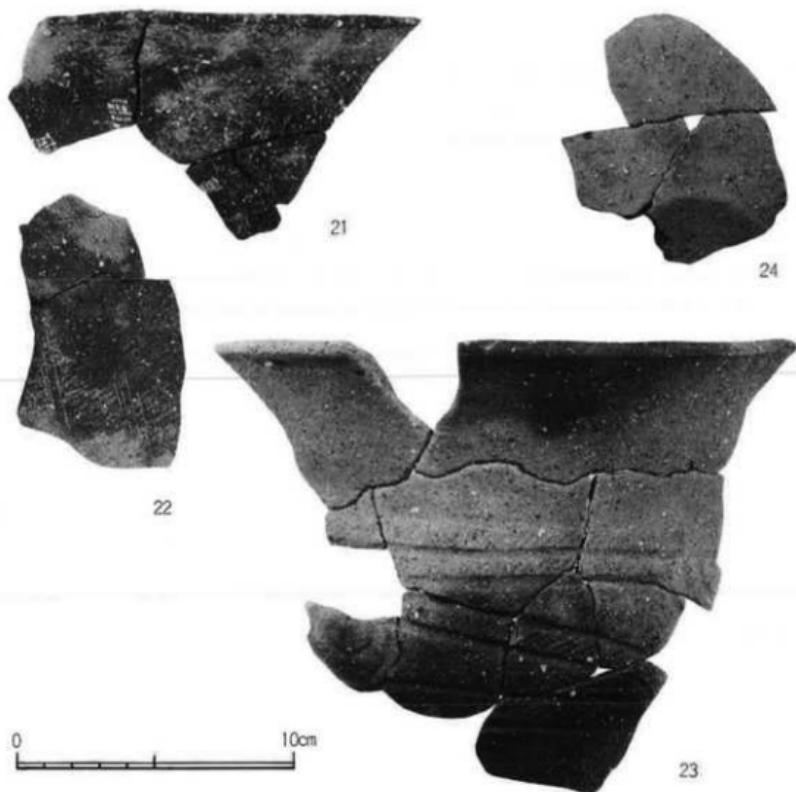
9

圖版十三 弥生土器・縄文土器



0 10cm

圖版十四 繩文土器



西ノ辻遺跡第21次発掘調査報告

1990年3月31日

発 行 財団法人 東大阪市文化財協会

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所